

民権教師 霜島幸次郎を追って

——新聞記事の疑問

佐藤 章夫

はじめに

明治一八年（一八八五）、自由民権運動のなかで、朝鮮にてクーデターを執行し日本での内治革命を成功させようとして計画した事件があった。大阪事件と呼ばれている。この事件で爆弾の製造を手助けしたという人物が霜島幸次郎である。彼は、明治元年（一八六八）四月二八日、神奈川県相模国愛甲郡飯山村（現厚木市）に生まれている。

ところで、私が霜島のことに興味をもったのは、昭和九年（一九三五）八月一日付の読売新聞の多摩版に「三多摩の政党を語る」という連載記事をみつけたからである。この記事によると彼は「西郡熊川村の小学教員」をしていたことになっている。また『三多摩政戦史料』にも「西多摩郡熊川の小学教員」という同様の記載があり、どうしても

確認してみたいと思ったからである。

しかし、大阪事件では、福生・羽村・青梅などの多摩川流域からの参加者を、現在発見しえないところをみると、飯山村出身の霜島と『熊川小学校』とは、どのようにして結びついていたのかという疑問があり、この点を中心に検討してみたいと思う。

ふたつの『熊川小学校教員』

まず、読売新聞に連載された記事からみてみよう。先に記したようにこの記事は昭和九年八月一日版で、「三多摩の政党を語る 四——差し売りに変装 日野原で爆弾製造——自由党の巻C」という表題がついている。この記事では、霜島は教員をしていたので新知識に精通しているはずだから、爆弾製造も可能だろうと問われたので、言下にて

きると応えたとある。全文は長くなるので関連する一部をみてみよう。

爆弾製造の苦心―村野（常右衛門 筆者注）は幸ひ森久保作蔵方に火薬のあることを知り製爆の相談をしたが居宅では危険であり人目につき易いといふので甲州街道筋の日野原がよかろうと一決、差し売りに変装して通つてゐた。差し売りとは一厘銭や天保銭などの穴のある銭を差す小さな微弱な藁縄の撚つたものを売り歩く男のことで早く云へば質のよくない乞食のやうなものである。併し二人には製造の方法が判らぬ、といって濫りに人に聴く訳に行かない、一策を案じて、かふいうことは教員が新知識に富んでゐるから知つてゐるだろうと同志の一人たる西郡熊川村小学校教員の霜島幸次郎に図ると「出来る」と言下に答へたので大いに喜び早速霜島を師匠に製法に取りかゝつた。更に諸薬品の原料を得るためのある関係をたどつて大阪の薬種商の内藤某（六四郎か 筆者注）を同志に引き入れ、鳩麦蝕の罐を弾籠の代用として同人の手から薬品を求め熱心に爆弾の調整に當つた。霜島は同志中の矮小であつたが、小才が利き胆の座つてゐるところから種々参画し功勞を立てた。板垣内相のとき衛生局に入り、後転じて本所区長となつた。

この記事でみると、霜島は爆弾製造の中心的な役割を負つてゐるが、明治二〇年七月二〇日付読売新聞の大阪事件公判記事の内容は異なる。このことは本文の主旨ではないので指摘するにとどめておこう。

次にもうひとつ「西多摩郡熊川の小学教員」という記載のある渡辺欽域著『三多摩政戦史料』（日本産業新報社、一九二四、筆者は一九七七年の復刻版を参照）について少しふれてみたい。

ところで、『三多摩政戦史料』は三多摩地域の近代史を知る基礎文献のひとつになつてゐる。地方新聞社の記者をしてゐた著者が、取材当時生存してゐた政治家をたずねてまとめているのだが、過去の聞き書きということと、そのはなしの出所を明記していない欠点もあり、史料価値として不満が残る。一方、読売新聞の記事も前者との重複が多く、かなり参考にしてまとめたのではないかという疑いもあり、新たな取材調査とは思われない。また、記者の署名も見当らず史料とするには不安である。

しかしながら、私自身、激しく揺れ動く明治に生きた人物を追及してみたいという動機も手伝い、これらの記述を手掛りに調査を進めてみたが、これを裏付ける確固たる史料は発見できなかった。

熊川学舎は、明治七年（一八七四）七月、福生院を仮校舎として誕生、明治一〇年（一八七七）、熊川神社境内に校舎を新築した。翌明治十一年（一八七八）、東多摩小学校と合併し、明治十三年（一八九〇）までこの東多摩小学校の分校時代が続く。

東多摩小学校とは「人民一般必ス学ハスンハアルヘカラス」という学制頒布の趣旨によって、長徳寺の本堂を仮校舎に、明治六年（一八七三）六月開校した福生学舎の後身である。

明治八年（一八七五）、羽村・川崎・五ノ神・福生・熊川の五つの村を合併して多摩村（明治一五年に解体）となったため、東部にあたる福生・熊川は福生村に新たに校舎を建



晩年の霜島幸次郎
（渋谷区区議時代）

築した。新校舎誕生とともに校名を福生学舎から東多摩小学校に改名、熊川学舎はその分校という形をとった。

ところで、霜島は大阪事件で告訴されたとき事件関係者の中では一番の年少者であった。一九歳である。そのときの政府史料によれば「小学校補助員」と記載されている。彼が小学校に勤めていたのは明らかであろう。その霜島が当時の熊川で教壇に立てたとすれば、熊川神社境内にあった東多摩小学校分校時代の「熊川学舎」であったと思われる。

当時の学校運営を知る史料をみてみよう。熊川神社所蔵の明治一六年五月『東多摩支校月給仕払表』と、同六月『東多摩学校支校仕払』という教職員への給与支払の明細帳がある。その四名の教職員の中には霜島幸次郎の名前はない。大阪事件の行動隊員のひとり、大矢正夫も一五歳で助教をしているので霜島が若すぎることとは決してない。また、神奈川県栗原村（現座間市）出身の大矢も、南多摩郡川口村（現八王子市）で教鞭をとっている。当時の厚木、八王子、福生は神奈川県であり、故郷を遠く離れてという認識は少なかったとわかっていいだろう。ちなみにその四名の教職員とは、豊原享・野口伊織・斎藤八百蔵・内出猪十郎である。

また、熊川学舎は今の福生第二小学校にあたり、その創立百周年を記念して刊行された記念誌の在職職員一覧表に

も霜島はいない。

ただ、熊川神社に残されている古い卒業写真に写っている人物が霜島ではないかと思わせるのだが、これは大きな根拠にはならないだろう。

南多摩郡鶴川村とのかわり

「時下残暑之候、益々御清栄之由奉賀候、陳者貴下御出獄之上ハ大阪原平方ニテ監視御勤メ相成御所存之由聞及候ガ、右ニ就テハ県下一般其議論モ甚タ多く、先ヅ爰ニ輿論トモ申スベキハ、今日ハ県下之状況も貴下御記憶ニ存スル所ヨリハ余程進歩致候故、自然御尽力ヲ乞フベキ事務モ少カラズ」(町田市野津田町 村野家文書)

霜島が南多摩郡鶴川村(現町田市)出身で九歳年上の村野常右衛門に宛てた書簡の一部である。この書簡は村野が大阪事件に参画し、軽禁錮一年監視一〇ヵ月の判決を受け和歌山監獄に入獄していたとき、霜島が村野の一日も早い帰郷を望んで書き送ったものである。(彼は村野宅へ私宿していたこともある(霜島正氏談) 明治二十一年(一八八八)八月一〇日付、住所は郷里飯山になっている。)

無罪放免の判決を受けた霜島の行動はすでに熊川ではない。また、おとなしく故郷に引きこもる型の人間でもなかった。

彼は、南多摩郡野津田村(現町田市)で『法律研究会』

に出席している。この会の目的は、「知識ヲ交換研磨」し「懇心ヲ厚ク」し、「徳義ヲ振起スルコト」にあった。その目的達成のために毎月一回「演説討論質疑ヲ行」っている。霜島は八月三〇日の開会式と九月一五日の二回出席していたことが残された史料から読める。この「法律研究会規則」は、明治二十二年(一八八九)五月六日発行の雑誌『講法』第一号の中にはさみこまれていた。同会の出席者に河井義平の名前がみえる。河井も鶴川村で教員をしていたという。霜島もこの地で教員をしていた可能性が強い。それを判断しうるような史料を次にみてみよう。

明治二十二年九月二五日発行の「絵入自由新聞」の記事である。関連の一部を記す。

「新天地にんげん紀念懇親会 去る十四日神奈川東南多摩郡鶴川村役場詰合員一同井部内小学校教員二三名が発起となり、草薙楼に於て鶴川新天地 紀念の懇親会を開きたり。会員五十名にて霜嶋幸次郎氏しむらじハ起て開会の趣意を述べ、中溝昌弘氏ハ本村議員及び役場吏員悉く其人を得て満足すと云える答辞を述べ、次に神藏喜六、中溝五郎二氏等、苟も一つの団体を為す以上物に触れ事に感じ団体の意志を発表せざる可からず、満堂諸名自ら任ずるに鶴川村の精神を以てし斯の団体をして雄飛活動せしめられた」

(旧字体は新字体に改めてある。)

霜島は、この懇親会の発起人を務め、開会の趣意を読む

など中心的な役割を果たしている。「部内小学校教員二三名」のひとりではなからうか。ちなみに、佐藤孝太郎著『三多摩の壮士』（昭和四八年発行）の大阪事件の記述の中で、彼霜島は「同（南郡）鶴川村教員（一）、のち本所区長」と紹介してある。自由民権運動で奔走していた行動圏はどいうやら故郷愛甲郡か南多摩郡辺りと思われる。「鶴川」と「熊川」の読み誤りではなかったかということも考えられよう。

おわりに

熊川村の霜島を知るには史料が足りない。だからといって、彼が熊川小学校にいなかったという結論を下すのは早計であろう。大阪事件の後、いったんは故郷に戻り、村野らを慕い鶴川へ向かったと推測することもできる。

当時の自由党が設立した有一館という文武研究所が東京築地にあり、神奈川県つづらの割り当てが六名。そのひとりに霜島がいる。大阪事件での神奈川出身者と有一館の結びつきは強い。そしてこの神奈川グループと南多摩郡鶴川村のつながりも少なくない。この鶴川村には村野が設立した凌霜館りょうそうがあり、自由民権思想の学習が盛んであったという。とすれば、彼と「鶴川村」との関係が深いと判断した方がよいのではなからうか。

私の準備不足も手伝い十分に論を進めることができな

った。今後の調査・研究をまちたい。

ご子孫からの聞き書き

若いとき、あごの下につっかえ棒をして睡眠と闘い勉強した彼。故郷、小鮎小学校と古沢小学校の統合問題で二つの村が対立していたとき、議論に疲れねていた人の手をとって爪印を押し解決に力添いをした彼。町田から牛込へ引越するとき、大八車に家財を積んで大山街道をのぼった彼。東京市に勤めていたとき、妻かねの病を気遣い海外視察を断った彼。本所区長のとき、碁に夢中になり翌朝出所を遅らせあやうく震災を免れた彼。昭和九年早春、脳貧血をおこし火ばちに手をつっこみ、その火傷が重く体調をくずしてしまった彼。その年の六月一七日、渋谷の羽沢（現渋谷区広尾）の自宅で死去。肝臓がん。墓は西麻布妙善寺。

この文をまとめるにあたり、多くの方のご協力をえた。とくに、渡辺奨氏には貴重な史料をみせていただくなど多くのご教示をいただいた。また、霜島幸次郎のご子息、霜島正氏（渋谷区広尾在住）、ご子孫の霜島正男氏、志村直治氏には大変お世話になった。心から感謝します。

注（一）大阪事件の計画が発覚した明治一八年、「鶴川村」はまだ誕生してない。明治二二年四月の市制・町村制の実施によって八ヶ村が合併し「鶴川村」となった。本論ではふれなかったが大阪事件関係の政府史料（『大阪事件関係史料集・下』）では

霜島は『小学校補助員』と記されている。この「鶴川村小学校教員」は『鶴川村の』と読むのが妥当と思う。また、明治一八年、この鶴川地区には「鶴川小学校」という名称の学校はない。野津田学校、小野路学校、研精学校、小山田学校、育英学校、励精学校、能ヶ谷学校の七校である（『町田市史料集第九集』）。本論で記した河合義平は野津田の人。村野常右衛門は野津田村戸長を勤めたことがあるなど、もし霜島が鶴川地区で小学校の補助員をしていたとすれば野津田近辺の小学校であった確率は高いだろう。

〈参考文献〉

- 『福生町誌』『東京百年史第二巻』『町田市史』
 『町田市史料集第八集』『三多摩自由民権史料集下』
 『大矢正夫自叙伝』『新編明治精神史』
 (さとう・あきお 福生市史近代調査員 日野市在住)

霜島幸次郎略年譜

明治1・4・28 神奈川県相模国愛甲郡飯山村二五八番地

(現厚木市)に、父新右衛門、母サダの二男として生まれる。

18・7か8 自由党設立の文武研究所・有一館へ入館

22(?) 8・30/9・15 法律研究会に出席

22・9・14 新天地記念懇親会で開会趣意を述べる

24・4・21 東京専門学校(現早稲田大学)邦語政治科第一

年級に編入

26・7・15 同校 第三年級修了 卒業

このころ故郷小鮎村の行政に携わる。志村家に下宿。

(29年ごろか) 内務省衛生局に勤務(職員録にはない)

33・5/36・3 神奈川県南多摩郡町田村(現町田市) 助役

34・11・28 志村かねと結婚

35・3/36・9 町田村村長

38/43 東京市京橋区役所区書記

44/45 東京市役所第三部部长付主事補

大正1 東京市役所第一部勸業課主事

2/3 東京市役所第二部商工及統計課主事(課長)

4 " 水道課主事(課長)

5/14 本所区役所区長

昭和4(?)/7 渋谷町町会議員

7/ 渋谷区区会議員・学務委員に選出

9・6・17 渋谷区羽沢(現広尾)の自宅で死去 六七歳